

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編 ⑮

田宮 治

夢の目標

今日の一戦でも、その事実を証明するかのようになり、まるで一流芸の追い犬で、作戦どおりの見事な戦いぶりである。どんな劣悪な条件でも、必ず無傷で完勝するのは並の猪犬にできることではない。

日頃からそのこと（無事）に拘った鍛錬の連続でのみ仕上がる犬群の猪止め芸がいかに完璧に完成しているかである。それを如実に物語る確かな証が、無傷で完勝することなのである。

たかが猪犬、されど猪犬であつて、傍目（はため）で検証し想像して理想論で物言うほど猪犬の完成は生やさしいものではない。

基本的に猪と犬が直接戦えば猪が勝つに決まっている。けがをすれば犬の実力が猪に劣っている

からである。猪猟で突き当たる現実には、猪猟人の想像を遙かに超える恐ろしい世界であり、達人が自慢の名犬をもって猪に挑んだとしても、出会う猪や戦いの場所によっては、一瞬にして命を落とすという危険な勝負なのである。

だから、「咬み止め犬は嫌だ」「猪は獲れるがけがが絶えない」「二頭くらいは犬で猪が獲れないようでは、猪犬失格で見てもらえない」と言い切る猪猟人もいる。

だが、私からすれば頂点辺りの猪猟や極致の猪犬芸を知らない、いわゆる中途半端な猪犬観がそのように言わしめているのだと思う。その程度の犬芸でもって猪犬を論じるのは、猪犬の鍛錬を軽んじた結果であつて、努力を尽くせば必ず出来る猪犬の一流芸を否定するものである。

頑張つて仕込んで「これが俺の猪犬だ！」と堂々と宣言できる一流犬群なら、そう簡単にけがや命を落とすことはない。このことが猪犬作りの大変重要なところであり、この自信がなければ、安心して猪猟を実践し、極致の犬芸を示して、最高に楽しい猪猟道の道案内などできるものではない。

いづつこの獵場であっても、思いどおりの見事な猪猟を実践して、人様の心に残る名勝負を実行するためには、猪犬が絶対に殺さない訓練が必要なのである。だから、決してけがをしない一流芸に仕上げることが重要なのである。

猪犬の使役法であるが、何の根拠もない「一銃一狗である」「二頭で猪が獲れなければ駄目だ」といった獵人の身勝手な見栄はやめにして、この猪と戦うのであれば、

この犬群の中から一匹を見て無事にする。つまり、この頭数で戦えば無理なく絶対に無傷で完勝できるというような、実戦に即した犬たちの側に立った安全と安心を第一に作戦を立てて使役することである。

素晴らしい猪猟とは、愛犬たちを思いやり、守り抜く心であり、猪猟を安全に安心して楽しむ獵心だと思ふ。

私がいつも追い求めている猪猟とは、猪猟を安心して楽しむのであれば、それだけの努力をすべきで、殺されたりけがさせたくないものであれば、必ず無傷で完勝できるまで頑張つて犬群を訓練して挑戦し続けて一流芸に仕上げることがである。

この万全の備えがあれば、実際に猪猟のどんな戦いでも、百戦錬磨の居残ったグレ猪が相手であっても、自信を持って思いどおりに戦つて必ず完勝でき、猪猟を心から楽しめると思ふのである。

猪猟人が常に心掛けて、決して忘れてならない大事なことは、猪の安全と安心を第一に、猪に勝

つために何をすべきかをじっくり考えて、できないことを必ずできるように万全の準備をするという当たり前のことをしっかりやり遂げることである。

猪猟人ならば「絶対に猪に勝つのだ」と自身に誓う不退転の決意と覚悟、そして責任感を持って、いつまでも受け継いで堂々と突き進める猪猟の王道を構築したいのである。

猪犬作りに始まって、猪犬観も猪猟法も人それぞれで、押し進める道順も到達レベルも千差万別で

あるが、どの猪猟人でも例外なく克服しなければならぬのが、自分の猪猟法に合った猪犬の仕上げ方である。

猪に勝つために練り上げた犬芸を、この犬群を使ってこのように戦うのだという猪猟の方向性だけは、どの猪猟人でもみんな同じだろうと思う。だから、この機会に理解してもらいたいと、大回りして繰り返し私の存念を発信した次第である。

ぜひ分かっていたいただきたいのが、いま激戦の真っ只中にあるこ

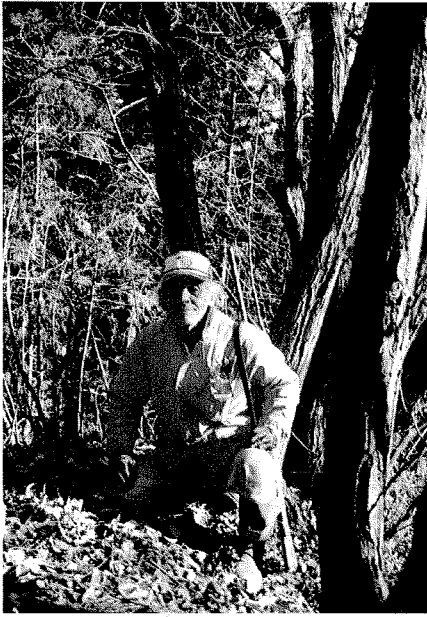
の大作戦であり、犬たちの戦いぶりなのである。頂点を目前にしたこの一戦は、想像を遙かに超えた恐ろしいほどの苦戦になってい

て、何もかもがとびっきりの難題となつて突き付けられている。だが、この一戦には絶対に負けるわけにはいかない。この特別な激戦を必ず勝つて、北嶋氏を見事に咲かせ、喜んでもらいたいのである。そのために私に何ができるのか。そして、どれほどの力を押し出して示せるのが、今まさに私が置かれている現実である。

「何くそ、こんなことぐらいで負けてたまるか！」と、こんな時に対策を立て直すために道の傍らにどっかりと座り込み、ボトルの水をガブ飲みしていた。そして、流れ落ちる汗をタオルで拭いながら、「ユンケル」をグッと一気に飲み干して、ここからの激戦に絶対に負けない気持ちと体調を整えていた。

この歳（七十五歳）でも、「いざ鎌倉」という大事な局面で、思うように身体が動いてくれないのは、猪猟の要である勢子など務まるものではない。並外れた体力を維持するために、私は毎日犬舎で一〇〇頭以上の犬たちを飼育・訓練して、六時間くらいは身体を動かしている。

五年くらい前から朝夕二回、「ＱＰコーワゴールドアイ」二粒と「アクテイジＡＮ錠」三粒、それと二本の「ユンケル」を飲み続けて、マリナーズのイチロー選手の元氣にあやかっ、いつまでも猪猟で活躍できる体調管理をしっかりとやってきた。これも年齢からくる大切な備えであり、現役バ



山彦会の顧問であり、私のただ一人の猪猟の師匠である満兄。小学三年生頃から兄の後を追って覚えた猪もできなくなるかもしれない。八十四歳で体調を崩している



満兄と一緒にイノシシを追った山に行くと、「もう一度、一緒にやりたい」と思いが募る……

リバリで続行できるための大事な心構えである。

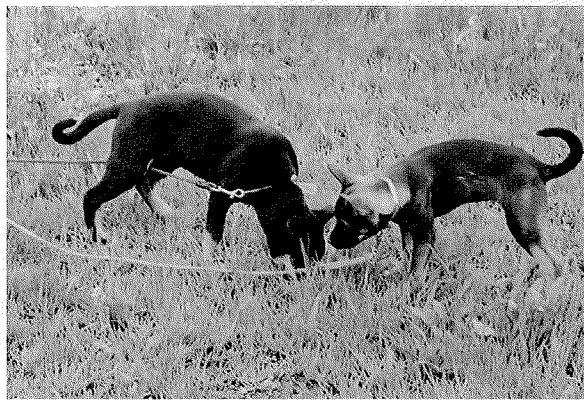
さらに、獺に出る時は「ユンケル」は別口で一、二箱（十本入り）を必ず持参して、仲間に配ったり、いざこれからという大事な時にグッと一気に飲み、気合を入れて頑張っているのである。そのお陰かどうか、この歳でも足腰（特に膝）は痛まず、若者と互角に獺場をとり回れるのだと思っている。

歳をとりたくなかったら、あらゆる方法を考えて猪といつでも真っ向勝負できる丈夫な体力を維持しておくことである。

長い道程であったが、この二年間の目的である頂点までの実戦の間では、猪獺の極意やその意義を探究しながら、備えなければ絶対に達成できない猪犬芸と体力を限界まで鍛え上げて、できなかった懸案を見事に乗り越えられるまで、頑張っただけで示してきたのである。

壮大な夢の目標（頂点）を達成することや、猪獺の上級編で「これが猪獺の極致の戦いであり、猪

今年仕上げの仔犬たち（三カ月）。草の中にはイノシシのあばら骨一本が埋めてある。毎日の綱訓練で言葉をかけて、何を探すのかを教える。獺場が楽しくなる



犬の一流芸である」と堂々の戦いを通してその成果を集大成できるのも、ただただ念入りの備えに基づいた緻密な繰り返し、大事な決め手となっているのである。

さらに、夢の目標や上級編のすべてにおいて、私が立案して上り詰めて完成するまでの戦いぶりを順次示し続けてきたことは、猪獺

のあるべき大道と猪犬芸の完成度を、実戦の中から少しでも汲み取ってほしいという切なる願いでもある。

私が立案したからには、何もかもが独自の猪獺法で見事集大成といきたいのであるが、これがなかなか大変で、まだまだやってきた半分も発信できていない。それが残念で、ゴチャゴチャと遠回りして、その時々仕上げてきた俺流の存念を記述することで、何とかご理解いただきたいのである。ただし、作家ではないので、その辺のところうまく説明できず思案している最中である。

それでも、ここまでやり遂げられた自慢の種は、子どもの頃、プロ獺師の父から教えられた兄たちの後を追っかけて獺野を駆け巡って培った体力と、五目獺（ヤマドリ、ウサギ、テン、クマなど）で叩き込まれた実獺感覚、そして、学生時代にバレーボールの選手（スパイカー）として鍛え上げた根性がそろうて出来上がっている。

それを存分に生かし、自分だけ

が持ち合わせた大事な能力を結集して、創意工夫を凝らし一戦一戦を精査しながら検討し、順次戦いのハードルを高めて進化と改善を重ねてきた。実戦するからには、戦いのすべてが勝ちに繋がるように万全の備えを確立しなければならぬ。その思いで頑張り通してきたのである。

大切なことは万全の備えがしっかりと出来上がってさえいれば、どんな壮大な目標や今回掲げた上級編の戦いでも、見事に乗り越えられるはずである。これまでの無謀な立案や至難の戦いであつても、それに勝る確かな備えがあれば、絶対に負けることはないと思っている。

猪獺の極致までの努力目標のよいうなことに言及してしまつたが、私は道順や、やり方こそ異なれ、すべての猪獺人が等しく地道な努力を嫌になるほど繰り返しして頑張らないことには、思いどおりに戦って、猪獺を楽しめる猪獺の頂点や、素晴らしい一流猪犬群には決して到達することも巡り合うこともないと思っている。（つづく）